



## 学会の横の顔 東京支部活動について The Tokyo Section as a Different Face of IEICE

東京支部長 相澤清晴

本会の東京支部の支部長を仰せつかって、その活動に微力ながら加わってきました。以前は、支部活動に関して、どのように企画運営され、何が行われているかについて全く把握をしていませんでした。今回、図らずもその活動に加えて頂き、支部では、実に多くのイベントが企画、実施されていることを知るに至りました。電子情報通信学会の正面の顔は、ソサイエティに根差した学術活動です。諸々の研究会や大会、論文誌などでの研究発表・情報収集の機会などは、この正面の顔です。それに対して、支部活動は、横の顔とでも言ったらいいでしょうか。全く異なる運営、異なる企画が進められています。しかも、かなりの活動があります。自分がそうであったように、ごく標準的な会員には、これらの企画・運営が支部運営母体で行われていることが多分見えていないと思います。今回、せっかくの巻頭言の場を提供されたので、この支部活動について御紹介したいと思います。ちなみに東京支部の活動は、25名程度の支部委員の貢献で成り立っています。その運営母体の規模としては1研究会程度の大きさです。

まず、どのくらいの活動が行われているかという、確定している昨年の数字（今年もほぼ同じ）を挙げてみます。大きく一般事業、教育事業、学生会事業と三つの事業があります。

- ・一般事業：一般向けに見学会6回、地域イベント2回、講演会4回。
- ・教育事業：小中高生を対象とした子供科学教室といったイベントを5回。
- ・学生会事業：学生員が、学生のためにイベントを自ら企画、実行し、見学会2回、講演会2回。そして丸1日かけた研究発表会（230件ほど）1回。（これだけが例外的に研究発表であるものの、学生だけで全て企画して実行するという特異なものになっています。）

以上、小さな運営母体の東京支部で主催する企画だけで、22件もありました。もちろん全ての実施を先ほどのメンバーだけでやっているわけではなく、学生会につながったり、子供教室といったイベントは、実行する組織とつながることで実施されます。なお、イベントの中でも見学会はとても人気が高く、電子メールで会員への案内を出すと数時間で定員に達することがほとんどです。このように学術発表とはまた異なった側面で、会員、学生、地域へ貢献しています。

正面の顔の学会活動は、学術活動であり、ソサイエティごとに運営されています。それに対して、この東京支部の委員の25名の学術的な分野は、基礎境界、通信、デバイス、情報処理と整理されておらず、多様性は最大のまま運営されています。このことが、支部活動が活発である源泉ではないかと思っています。支部の会合では、全く分野の異なる人たちが集まって、それぞれの企画を出して、意見を述べ合う場になっています。そこで行うイベントも必然的に横断的なものになります。企画に責任を持つのはその委員で、新しく何か始める、新しくなくても何かを行うという良い循環ができています。立場上何かをやらねばというのはあるかもしれませんが、学会はそれを助けるという位置付けが明確になっていて、この支部会合はとてもいいコミュニティです。細かく分野に分かれる前の学会活動の原始的な姿を一部とどめているのではないかとまで思います。

本来、どの学会も学術的なコミュニティのためにあるものです。健全なコミュニティが育っていれば、学会のアクティビティは高いでしょう。幾つものコミュニティがあるのが本会の魅力でもあります。いつもは学会の正面の顔ばかり見っていますが、横から見るとまた違った顔を持っています。機会があれば、是非支部の活動に関わってみることをお勧めします。